

珈琲の思い出一

私の弱点は和樹である。

エレベーターに1人で乗っているときや、プリンターから資料が印刷されてくるのを待っている間、会議の合間のふとした隙間に、和樹がするりと入ってくる。

2人でよく行った海辺の公園や、美術館、こっそり会うのに利用した博物館裏のベンチ、そんなところに行つた日には、もう私の心はすべて和樹でいっぱいになってしまう。

でも一番タチが悪いのが、コーヒーを飲むときだ。

和樹ほど、コーヒーをうまそうに飲む男を見たことがなかった。

3度目のデートで、私たちはS町の裏のカフェに行つた。このカフェは私のお気に入りの場所で、だから私がお気に入りの人しか連れていきたいくなかつた。

運ばれてきたコーヒーをひと口啜ると、和樹はほんの一瞬息を止めた後、

「ああ、いいね」と吐息まじりにつぶやいた。他愛もない、けれど楽しいおしゃべりを

しながら、時折、カップに口をつける。そのたびに和樹は「ああ、いいね」を繰り返す。

おしゃべり、べらべら、「ああ、いいね」。べらべら、べらべら、べらべら、「ああ、いいね」。

それがあまりにおかしいので、私は言った。

「そんなにこのコーヒーが気に入った？」

「うん、うちは妻がコーヒーが嫌いで、吹き出物ができるとかなんとかで、家では紅茶ばかりなんだ。」

「和樹さん、自分で淹れたらいいじゃないの？」

「何だか手間がかかりそうで、だからいつもインスタントだった。」

でも、こうして本当においしいコーヒーを飲むと、やっぱり、いいね、って思うね。」

そう言うと、和樹はまたコーヒーをひと口含み、「ああ、いいね」と呟いた。

鈴木優子